第１回座談会「大東文化学院本科第20期生　在学当時の思い出を語る」

2009（平成21）年10月22日、歴史資料館主催の第１回座談会が開催されました。座談会は大東文化学園の歴史を後世に伝え、モノだけでなく口述記録を含めて各種資料を残していくことを目的としています。今回の座談会に参加いただいたのは、大東文化学院本科第20期生である小川秀男氏、鈴木良雄氏、馬場武次郎氏、濱久雄氏の４名の方々です。

第20期生は、戦中の昭和18年に入学し、戦時非常措置により在学中は戦時体制下のために勉学だけに打ち込むことは出来ず、浦賀ドック等での勤労動員も余儀なくされました。

しかし、座談会での各氏からは、そういった特殊で過酷な状況下であっても向学心やユーモアを決して忘れず、学院での生活を謳歌された様子が口々に語られました。そういった時代を共に経験したからこそ、60年以上を経ても変わらない強い絆で結ばれた友情を今に培っていらっしゃるようでした。

４氏からは、在学時代の様子を自由にお話いただきましたが、大東での漢学授業のこと、当時教鞭をとっていらした錚々たる先生方のこと、自学自修の精神、戦時体制下での勤労動員活動やそこでの生活について、同期入学生たちのエピソード等が主だった話題となりました。今も大切に保管されている貴重な資料も沢山お持ちいただき、教科書、出征時の寄せ書きされた国旗、写真等も多く見せていただき、それらの一部をご寄贈いただきました。

会話の端々より学院時代の方々に共通する高い教養、特に漢学に関する造詣の深さが窺われました。時代の逆境に甘んじず、学問に真摯に打ち込んだお話が非常に印象的でした。

（大東文化歴史資料館　浅沼薫奈）

左より、濱久雄氏、小川秀男氏、鈴木良雄氏、馬場武次郎氏。
出征時寄書（小川秀男氏蔵）を手に。

学園関係者インタビュー・・・

大東文化大学体育連合会「女子部々歌」の創作について

2009年12月６日、杜の都仙台に佐藤美和子氏を訪ねた。佐藤氏は、大東文化大学第23期生である。

大学進学を機に仙台から上京し、文学部日本文学科に籍を置きつつ体育会の活動も活発に行っていた佐藤氏は、現在もその時の多くの仲間たちと交流がある一方、青桐会宮城県前支部長も務め、息子さんもまた大東文化大学に進学したという“大東一家”の方である。

“スポーツの大東”の時代只中に在籍した佐藤氏はアーチェリー部に所属していたところ、あるときスケート部顧問の加藤先生から「女子部」の歌をつくってみたら？と声をかけられた。それがきっかけとなり、弓道部の友人たちとともに「女子部々歌」の歌詞を考えることになったという。「投げ打ち踊る乙女達 走り滑る乙女達」というスポーツの“動き”を取り入れたオリジナリティーあふれる歌詞は、加藤先生の娘さんが作曲したメロディにのせて、池袋のロサ会館にて披露された。昭和48年頃のことだったという。

歌詞を仲間たちで考えているときに「将来このことで取材があるかもね」と友人たちと冗談を言っていたら本当になったと笑いながら語る佐藤氏は、快活な文武両道の大東精神を持った方だった。佐藤氏からは大学合格通知や入学時の資料をはじめ、成績通知、教育実習の記録、父兄会名簿、授業料の振込み領収書や当時の健康診断記録まで、長年にわたって大切に保管されていた思い出の品々をご寄贈いただいた。また、多くのご友人のお名前をあげてご紹介くださるなど、引き続き大東スポーツの歴史を辿るための便宜も図ってくださった。この場を借りて、改めて御礼申し上げたい。

（大東文化歴史資料館　浅沼薫奈）

佐藤美和子氏寄贈資料

＜資料寄贈ご協力のお願い＞

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、学園に関わる資料を広く収集しています。教科書・講義ノートのほか、写真・映像、機関紙・新聞など、ご提供いただけるものや情報がありましたら、お気軽にご連絡ください。ご協力を宜しくお願いいたします。